

防災歳時記（14）

—秋の日はつるべ落とし—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

出会い頭にぶつかる

秋の日は早く暮れやすいことのとえに「つるべ落とし」というのがある。井戸の水をくむためのつるべを井戸に落とすとき、勢いよく落ちることから生まれた言葉である。暦をみると、11月30日の日の入りの時刻は、札幌が午後4時2分、東京が午後4時28分、大阪が午後4時47分、福岡が午後5時10分。西に行くにつれて遅くはなるが、通勤・帰宅時にはもう真っ暗な所が多い。5月ごろより約2時間も日の暮れるのが早い。まさに「つるべ落とし」の秋の日である。

晩秋の夕方は9自転車と自動車の交差点の出会い頭の事故が多い。これは、「つるべ落とし」の日暮れの早さを、ドライバーが十分に認識していないからだという。自転車やバイクに乗る人は、点灯はもち論、白いヘルメット類を着用したいものだ。

秋の行動は余裕ある日程で

秋は、日が早く暮れると同時に、夕暮れどきは気温が急に下降する。油断すると、寒さのために体調を崩しかねない。今から10年



写真1 晩秋の浅間山（95年11月写す）

ほど前にこんな事故があった。

10月30日、東京都西多摩郡のある町の小学校5、6年生120人が奥多摩町の棒ノ嶺（976m）に登山・遠足に出かけた。午後から霧がかかり道に迷った末、早い日没で辺りが暗くなり、立ち往生する騒ぎとなった。

引率の先生の一人が下山して、町役場を通じて救助を求めたので、消防団や東京消防庁の投光器付きのヘリコプターが現場に急行した。午後7時過ぎ、山頂付近で全員の無事を確認。ライトで足下を照らしながら、ふつうなら40分の下山路を2時間もかかって下山した。寒さと疲労で生徒2人が気分が悪くなったほかは、けがなかったのが不幸中の幸いであった。

キノコ採りなどで、山へ行く人は、「つるべ落とし」の教訓を守り、早めに下山するなど余裕のある日程を組んでほしい。

落ち葉がおこす自然災害

色づいた木の葉が舞い落ちるのを眺めては、何となく憂うつな気分が襲われるのは世の常である。「つるべ落とし」の秋の季節になると、決まって気分がめいる「季節性うつ病」という病気が増えるそうだ。

春先は情緒不安定の病気が発生しやすく「木の芽どき」という言葉があるほどだ。

同様に晩秋の心身の変調のおこりやすい時期を「落ち葉どき」と呼びたくなる。「うつ病」の治療には、強い光を1日に2～3時間ずつ、1～2週間体に当てる「光療法」が効くという。

落ち葉が小雨や露で濡れると、スリッパ事故などをおこすことがある。適度なこう配のある鉄道路線で、濡れた落ち葉がレールと車輪の間に入り込むと、落ち葉が潤滑油の役目を果たし、滑りやすくなる。すると運転不能となるので、付近の砂を線路上にまいて、運転を再開する。こうした現象は、長野県や関東北部などの路線に見られ、JRでは「自然災害」に分類している。秋の風物詩の落ち葉もやっかい者である。

冬鳥、初雪の便りが相次ぐ

ガン、カモ、ハクチョウなどの冬鳥が早く日本に来る年は、冬の雪が多くなるという天気のことわざがある。冬鳥が来て高い山に初雪が降ると、やがてふもとの村や町に雪が訪れる。



写真2 新潟県瓢湖の冬鳥 (96年11月写す)

○妙高山に三度、浅間山に七度雪が降れば、次は里にも降る(新潟・長野県)

××山に何度か雪が降ると、次は、ふもとの里や村にも雪が降るということわざは全国に数多い。当然、高い山ほど度数が多い。

ちなみに、浅間山(標高:2,568m)の初冠雪の日(山頂付近に雪が積もっているのを山ろくの測候所から初めて見えた日)。

山頂で雪が初めて降った日ではない)は平均して11月1日、山ろくの軽井沢測候所の初雪は平均して11月15日である。

晩秋から初冬にかけて現れるおだやかな晴天を「小春日和」という。小春とは、旧暦10月の別名。いまの暦では11月から12月前半くらいに当たる。

外国にも秋に小春日和のようなおだやかな日がある。欧米では「インディアンサマー」、中欧・北欧では「おばあさんの夏」などと呼ぶ。小春日和には、日光によく当たり、冬に備えて体調を整えておきたい。